

Монгол улсын шинжлэх ухааны академи, хэл зохиолын хүрээлэн (モンゴル科学アカデミー言語文学委員会編「モンゴル語専門用語研究」)

I Монгол нэр томъёо судлалын товчоон  
(モンゴル語専門用語の研究概要) (1924-2014)

II Нэр томъёо судлалын өгүүллүүд  
(専門用語研究論集)

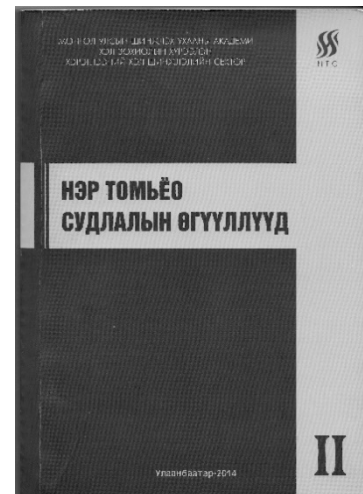
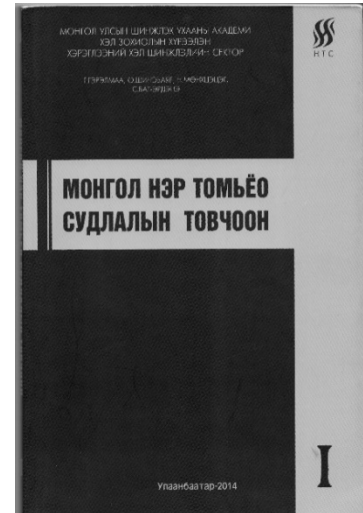
Уланбаатор 2014  
I 158 pp, II 224 pp.  
ISBN 978-99962-2-958-9  
ISBN 978-99962-2-957-2

評者 北村彰秀

モンゴルで専門用語の決定組織ができた 90 周年を記念して出版されたものである。全 2 巻からなり、2 巻全体の書名はないため、便宜上「モンゴル語専門用語研究」としておく。

なお、この 2 巻本で扱われているのは нэр томъёо, 英語の terminology あるいは term にあたるものであるが、日本語訳としては、学術用語、術語、専門用語、翻訳語、訳語などが考えられる。しかし、食品のバターやジャムを学術用語とよぶには抵抗があるし、また、翻訳語ではないモンゴル固有の牧畜用語も扱われているため (ただし翻訳との関連においてであるが)、主に専門用語という語を用いることにした。

モンゴルは近代化とともに、欧米の文化、技術、文物が大量に入って来た。そこで言語の上ではそれにどのように対応したか、どのように訳語を決定したかということは、興味深い研究課題である。(これはモンゴルのみならず、日本、またアジア全体に共通の課題であろう。) そのため、歴史的な研究にかなりのウエイトが置かれている。また、訳語あるいは専門用語の不統一にどのように対処すべきかということも扱われているが、これもモンゴルのみならず、日本、また多くのアジアの国々、いや世界全体にわたる共通の課題であると思われる。日本のことを研究する上でも、アジアの他の地域の情報は、大きな刺激となるであろう。



全体としてモンゴル語で書かれているが、第1巻の中表紙と目次は英語でも書かれており、また、研究者の業績にあげられている論文や著書の中にはロシア語や英語のものも少なからずある。また、第2巻の論文・論考集はロシア語や英語で書かれたものもあり、また、モンゴル語で書かれたものの多くは、ロシア語のレジメがついている。そのため、モンゴル語の知識がなくとも、ある程度内容を把握することは可能であると思われる。英語の部分だけを見ても、概要のある程度の把握は可能であろう。しかしながら、実際にこの書を手にとられる方は少ないと思われるため、ここでは資料紹介という形でこの書の内容を記すことにしたい。

まず、目次に沿って内容を簡単に述べ、その後、全体から見えてくるモンゴル語専門用語の歴史をまとめ、次に文献案内と論文・論考の中から特に注目に値するものを紹介し、必要に応じて多少コメントを加えてみたい。

全体の内容は次のとおりである。

## 第1巻 モンゴル語専門用語の研究概要

### 第1章 近代以後の専門用語の歴史

1. 専門用語決定組織の生成期（1924－1961）
2. 専門用語決定組織の発展期（1961－1991）
3. 民主化以後（1991－）

### 第2章 専門用語研究の諸文献

専門用語委員会ニュース（ここで、術語委員会ニュースの第1号からの発行年と専門分野が網羅的に記していないのはやや残念である）、その他専門用語委員会の出版物、専門用語辞典、単行本、学位論文、「専門用語研究」という学術誌。

### 第3章 研究者紹介

14名の研究者の写真（中国の研究者は写真なし）、略歴と著作物リスト。なお、ここで研究者の中には、専門用語制定にたずさわった者も含まれている。なお、専門用語のみを研究している研究者は少ないため、専門用語研究の分野で特筆すべき研究者ということである。注目すべきは、外モンゴルすなわちモンゴル国の学者のみならず、内モンゴルすなわち中国の内モンゴル自治区の学者が1人、ロシアのブリヤートとカルムイク（ともにモンゴル系民族）の学者がひとりずつ含まれていることである。中には、著しいナショナリストとしての立場から外来語をできるだけモンゴル語に直そうとした人物もあり、また、外来語に対してそれほどアレルギーを示さなかった者もいる。

## 第2巻 専門用語研究論集

すでにいろいろな学術雑誌等で公にされた論文、論考が、ここに集められている。

第1章 専門用語の歴史に関する論文、論考（10編）

第2章 専門用語の決定、統一、普及に関する論文、論考（10編）

第3章 特定ジャンルの専門用語についての論文、論考（7編）

次に、本書の第1巻第1章の内容にそって、また2巻全体として読み取ることのできるモンゴルの専門用語の歴史について簡単にまとめてみたい。(第1巻の専門用語の歴史の部分を第2巻の歴史関係の論文・論考が補う形になっており、それぞれを別々に紹介すると煩雑になるため、このような形にした次第である。それ以外にも、文献紹介の部分の中にも専門用語の歴史にかかわる記述がある。)

モンゴル語専門用語の制定の歴史は革命前から始まる。大蔵経を主にチベット語からモンゴル語に訳したとき、*Merged Garhu-yin orun* (学者基本典あるいは賢者の源泉などと訳される) という辞書が編纂されたが、これは専門用語制定の歴史上、注目されるべきものである。また、清朝時代、多くの文献が中国語からモンゴル語に訳され、モンゴル語語彙が豊かになっていった。

革命後、1924年には専門用語制定組織ができ、1925年には専門用語委員会が結成された。これはモンゴル科学アカデミーに属する組織であり、年に4回、委員会ニュースを発行し、モンゴル民主化の時まで続いた。委員会ニュースとは委員会の活動報告ではなく、委員会で話し合われて決定した専門用語のリストである。まず、マルクス・レーニン主義の文献をモンゴル語に翻訳するために政治・経済の用語が決められ、その後、化学、数学、物理学、植物、動物等の用語が決められていった。なお、委員会ニュースは最終決定ではなく、これに対する一般の反応を聞き、それを踏まえて専門用語に対する修正がなされた。

専門用語制定にあたっては、モンゴル語の専門家だけではなく、専門用語のかかわる学問・技術分野の専門家の意見も聞くようにした。

専門用語が増えてきたので、すべての用語を辞書の形にまとめて、1964年にロシア語・モンゴル語対訳専門用語辞典として出版した。その後も専門用語制定作業が続いたため、1970年には、対訳専門用語辞典の第2巻を出版した。そして1979年には第3巻が出版された。つまり、第1巻以後制定された専門用語を第2巻にまとめ、第2巻以後制定された専門用語を第3巻にまとめたわけである。

民主化の時代になり、モンゴル貨の価値が大幅に下がり、経済的困難に直面したため、委員会ニュースは発行されなくなった。(しかし最近、専門用語委員会の活動が再開しつつあるようである。)

民主化以前にはいろいろな専門用語辞典が専門用語委員会から出たが(例えば

1973年にはモンゴル語・ロシア語・ラテン語・チベット語・中国語対訳植物名事典が、委員会ニュース 89, 90号合併号として出ている)、民主化以後は、専門用語委員会以外のところからいろいろな専門用語辞典が出ている(例えば植物、動物、医学、コンピューター等々の用語辞典)。

なお、民主化以後、用語の不統一、外来語(特に英語)の氾濫という問題が起こってきている。

また、委員会によって決められた専門用語も、すべてが順調に定着していったとは言いがたい。できるだけ外来語を避け、モンゴル語で表現しようとしたわけであるが、あまりに長いものは受け入れられなかった。また、モンゴル語として無理な造語、不自然な造語は必ずしも受け入れられなかった。全体として、モンゴル語ではなく、本来の外来語による表現に置き換えられていく例が少なからずあるようである(例えば日本語で言えば電子計算機がコンピューターに、蓄音機がプレーヤーになるごとく)。民主化の影響も無視できないが、しかし、民主化というものがなかったとしても、このような現象は起こって来たであろう。専門用語制定作業はある程度はうまくいくのであるが、言語自体の生命力、成長する力、新陳代謝能力のようなものがあって、制定された専門用語も、すたれていくものもあることを認めざるをえない。

次に、文献案内の部分に出てくる興味ある文献をここにあげておきたい。ここでは、その中から、4つを取り上げて簡単に紹介してみたい。

1. Ч. Догсүрэн: Монгол нэр томъёо оноох, жигдлэх асуудалд (Ch. ドグスレン「モンゴル語専門用語の制定と統一のために」). Уланбаатор, 1988.

これは専門用語委員会が出したものであり、専門用語制定の手引書と言ってもよいものである。扱っている主な内容は以下のとおりである。

**専門用語(学術用語)の特徴、一般の語との違い**

専門用語の作り方——まずその用語が意味しているものを十分に理解しなければならぬ。作り方としては、意味をモンゴル語に訳す、外来語をそのまま用いる、既存のモンゴル語に接尾辞を加える等のほかに、古いモンゴル語を用いる、方言を用いるといったことまで書かれている。(専門用語の作り方についてはこの2巻本のあちこちに触れられている。)

**専門用語辞典の作り方**

「だれが専門用語を作るべきか」

**専門用語の統一方法**

2. Раашдонров: Монгол нэр томъёо зүйн тоймлол (ラーシドンロブ「モンゴル専門用語概要」). ӨМӨЗО (内モンゴル自治区), СХХ-ийн хороо (新聞印刷物言語委員会), 1996.

中国の内モンゴル自治区の出版物であり、かなり内容豊富な文献である。主な内容は、専門用語概説、中国における専門用語、モンゴル人民共和国における専門用語、韓国における専門用語、内モンゴル自治区における専門用語、ISO (The International Organization for Standardization) 等の国際的な動き (ICO と書かれているが、ISO の間違いであろう)、専門用語の制定・統一・普及の方法等である。

なお、内モンゴル (中国の内モンゴル自治区) と外モンゴル (モンゴル人民共和国。民主化後はモンゴル国) は共通の書き言葉を持っていたのであるが、モンゴル革命後、国境をへだてて別々の言語政策に従うことになった。そのあたりが扱われている点でも注目に値する。

(なお、内モンゴルでは著者がモンゴル人の場合、姓、父称は記さず、名前だけを記すのが慣例のようである。そのため、この文献の著者も、姓や父称の頭文字は記されていない。)

### 3. Нэр томъёо судлал (専門用語研究)

1998 年からほぼ毎年出ている学術誌である。毎回 10 名前後、時には 20 名近くの研究者が寄稿している。これを見ると、モンゴル国ではすでに専門用語研究が 1 つの学問分野として定着しつつあり、また、かなりの研究者がいることも知ることができる。

### 4. Z.エネビシ「牧畜関係の一般語句および専門用語の翻訳について」2000 年。

学位論文であり、出版されてはいない。モンゴル語への翻訳ではなく、モンゴル語からの翻訳が扱われているという点で、興味深い。筆者はまずそれぞれの専門用語が何を意味するのかわかり理解しなければならぬと主張するが、これは当然のことながら、鋭い指摘である。(例えば翻訳の際、語の理解が不十分であると、チーズが豆腐になるというようなことも起こりかねない。)そして、移動式牧畜(遊牧)と、定着式牧畜はともに牧畜であるが、違った用語あるいは用語体系があると筆者は主張する。(確かに、二つの牧畜形態においては、飼料というものも、畜舎というものも違って来るであろう。)モンゴル人ならではの研究成果である。

最後に、第 2 巻論文、論考集の中から、モンゴル語学者として有名な Sh. ロブサンワンダンのものを紹介しておきたい。

ロブサンワンダンは、新造術語が名詞ばかりであることを嘆き、もっと動詞のものがあってもよいのではないかと主張する。(日本語に例えていえば、「政治」ではなく「治める」、「裁判」ではなく「裁く」、「商業」ではなく「商う」を専門用語としてはどうかという主張である。)モンゴル語と日本語の文法はよく似ているため、彼の論旨を日本語からの例に置き換えて説明すると、大体次のようにな

るであろう。本来動詞であったもの、動詞起源のものは動詞で表現すべきである。名詞でなく、動詞であれば、受身形や使役形にすることもできるし、過去形にすることもできる。そのため、例えば、「過去における N 氏による裁判の結果」と表現するかわりに、「N 氏が裁いた結果」と、簡単に表現できる。(もちろん日本語とモンゴル語の微妙な違いもあるのではあるが、これで大まかな論旨は把握していただけるであろう。)

筆者は単純に言葉遣いの面から記しているようである。しかしこれは人間の心理の問題とも考えることができよう。また、思想伝達という行為は名詞化を伴うものかもしれない、また、名詞化することによって物事を動的にとらえることがなくなってくるのではないかと懸念する者もあるかもしれない。学問や教育の方法論ともかかわる、かなり深い問題である。

全体として、モンゴル人およびモンゴル語関係者（研究者、翻訳者）を対象として書かれているが、扱われている内容の大部分はかなり普遍的なものである。

特に専門用語の問題はいろいろな専門分野の重複関係、専門家同士の対立、言語政策、教育、外来語利用の是非、各国や地域の近代化の歩みの違い、専門用語の本来の意味の探求・確定あるいは再確認、社会主義陣営の言語政策等、いろいろな問題とかかわりがあり、少なからずわれわれの興味を引くものである。

.....  
【評者紹介】：北村彰秀（KITAMURA Akihide） モンゴル聖書宣教会所属。モンゴル語訳聖書の翻訳、出版、販売に携わる。また、東洋における翻訳の伝統の研究、聖書翻訳との比較を行い、あるべき翻訳のすがたを探る。

連絡先：a\_kitamura07@yahoo.co.jp